The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本軍戦時性暴力／性奴隷制問題との出会い方 ： ポスト「証言の時代」の運動参加
Author(s)	熱田, 敬子
Citation	架橋するフェミニズム ： 歴史・性・暴力. 2018, p. 83-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68084
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本軍戦時性暴力 / 性奴隷制問題との出会い方
――ポスト「証言の時代」の運動参加

熱田敬子

（早稲田大学文学学術院）

牟田和恵（編）『架橋するフェミニズム―歴史・性・暴力』第７章

2018.3.20　電子書籍版刊行

https://doi.org/10.18910/67844

ISBN978-4-87974-740-2　C3836

JSPS 科学研究費基盤（B）課題番号 26283013

日本軍戦時性暴力／性奴隷制問題との出会い方――ポスト「証言の時代」の運動参加

熱 田 敬 子

1. 「証言の時代」の後に

2017 年 8 月、日本軍戦時性暴力[注1)] 被害女性のうち、中国で対日謝罪賠償請求訴訟を闘った最後のお一人、黄有良さんが亡くなった。12 月には、映画「オレの心は負けてない」にもなった、日本国内在住の被害者で唯一謝罪賠償請求訴訟を起こした宋神道さんが亡くなった。90 年代から 2000 年代の日本軍戦時性暴力／性奴隷制問題においては、アジア、オランダなどの被害者が長年の沈黙を破って名乗り出、体験を語る「証言」活動を行って、謝罪賠償請求運動の中心となってきた。この「証言の時代」を担った裁判闘争の原告がこの世を去っていくことの意味は大きい。どの被害国・被害地域でも、証言活動を活発に行うことのできる被害女性は、もはや少数となってしまった。

その反面、日本軍戦時性暴力／性奴隷制問題は、今も未解決のまま残っている。しかし、未解決であることが何を意味するのかは、日本の社会においてはあまり共有されていない。例えば韓国においては平和の少女像の設立と、若い世代にまで及ぶ被害女性への支持の広がりがみられる。しかし、これに対する日本の反応は、国際関係学者の熊谷奈緒子など、日本軍戦時性暴力／性奴隷制の被害事実を認める日本の知識人たちでさえ、「真の和解を目指しているとは言い難い」、「他者を批判することに重点を置く」と解釈し、「反日運動とも受け取れる最近の攻勢」や、「攻撃的なナショナリズム」と非難するにとどまり（熊谷 2014：216-217）、その意義や韓国社会の背景が十分に理解されているとは言えない。

基本的には、こうした支援者・韓国への批判は、「女性のためのアジア平和国民基金」関係者の大沼保昭などが、基金事業がうまくいかなかった原因は韓国社会、支援団体の「反日さえ言っていればいい」（大沼・横田・和田 2006：26）という姿勢にある、と非難したことに端を発している。大沼は、ジャーナリストの江川紹子のインタビューに答えて、アジア女性基金が評価されなかったことが「中韓に謝ってもいいことない。かえって居丈高な態度をとられるじゃないか」という日本国民の思いにつながったと語っている（江川 2013）。日本と韓国の「和解」が必要だとする朴裕河は、「正義自体が目的化している」と、支援運動を批判し、「慰安婦」問題が解決しないのは被害女性を理念のために利用する支援団体のせいだと述べる（朴 2014：267）。

まず、事実を指摘しておけば、「中韓」と一体化されている中国は、アジア女性基金の対象国ではなく、基金事業は中国に対して行われていない。また、「＜平和の少女像＞は日本を嘲笑したり批判したりしたもの」ではなく（岡本・金編，2016：22）、「日本政府だけでなく、韓国政府・社会、そして観る者たちの歴史認識や人権意識のあり様まで問いかける作品」（岡本 2016：76）であることは無視されている。

被害女性たちが亡くなり、また高齢になって活動の主体が後の世代に移る中で、大沼や朴のような支援者批判は勢いを増している。しかし、こうした批判は現在でも公式謝罪・法的賠償を求め、日韓合意に憤りを表明する被害者が韓国国内にも多くいること、「日本政府に対して、まず私に謝罪し、賠償することを要求します」（石田・内田 2004：86）と言い続けて亡くなっていった被害者はアジアの他の地域にも多いことを見落としており、支援運動の実情、被害女性と支援者の関係の実態を踏まえない、多くは抽象的な議論である。

そしてもう一つ加えて指摘すれば、大沼は「中韓」と状況の違う国をひとくくりにし、熊谷奈緒子も「日韓にとどまらない慰安婦問題」としつつも、「そうではあっても慰安婦問題は、日本にとって戦略的にも重要な隣国である韓国との間で最も大きな問題になっているので、ここでは日韓関係に焦点を」しぼるとして議論を二国間に限定してしまっている（熊谷 2014：208-209）。こうした議論の仕方には、被害地域ごと、国ごとに全く異なる日本との関係や、個人と国家の関係の多様性を見ないという問題がある。

それでは、「支援者」とはどんな人たちであり、どのような動機でこの問題に取り組むのだろうか。本当に朴がいうよう

に、「理念のため」に被害女性の意思を無視しているのだろうか。現在でも、日本でも、被害地域でも、日本軍戦時性暴力／性奴隷制問題に新たに取り組み始める人たちは少なくない。ことに、筆者が日本を含めたアジアの国や地域で出会った若い世代の「支援者」たちは、かつて被害女性たちの存在が与えた強い運動のけん引力が失われつつあることに、最初から直面し、被害女性たちの闘いと、現在の自分が生きる社会における問題を接続しようとしている。筆者の目にはこうした運動を「ナショナリズム」などと単純に片づけることこそ、相互理解を遠ざけるように見える。

本稿では、以上のような問題意識を踏まえ、ポスト「証言の時代」の日本軍戦時性暴力／性奴隷制をめぐる運動を担う人たちが、どのような社会的な文脈のものとでこの問題にかかわるようになったのか、その時に被害女性たちのメッセージはどう受けとめられているのかを、中国、香港の若い世代のインタビューから明らかにする。

支援運動批判は、韓国の状況についても実証データを踏まえた批判を行っているとは言い難いが、ここでは韓国とはまた異なる状況、経緯のある中国や香港の支援者たちの経験を見ることで、地域や時代により異なる日本軍戦時性暴力／性奴隷制被害と、多様な支援運動のあり方を示す一助としたい。まず、2.1 で述べるように、ここまで筆者が使ってきた日本軍戦時性暴力／性奴隷制という用語と、「慰安婦」の語の違いから論じなければならないし、中国と香港の状況、個人と国家との関係も異なっている。支援運動を評価するためには、各地・各国の具体的な歴史社会的文脈と、現在の状況を踏まえ、被害女性と支援者の関係性や、支援運動がどのように展開されてきたかを実証的に検討しなければならないのである。

2. 日本軍戦時性暴力／性奴隷制と「慰安婦」という用語について

2.1 日本軍戦時性暴力／性奴隷制の用語について

本稿では「慰安婦」という言葉は使用しない。「慰安婦」という呼称は日本軍が採用したものであり、この言葉自体が日本軍兵士の視点であるとして拒否する被害女性は多い（尹 2011:38）。現在、被害女性の立場に立ってこの問題を扱う支援者、学者の多くは、「」をつけることで日本軍の責任を示す歴史用語として使用し、日本のメディアで多く使われる「従軍」という言葉は強制性を否定するものとして退ける。英語の表現は”Military Sexual Slavery by Japan”、つまり「日本軍性奴隷制」で統一している（尹 2011:42）。

中国山西省の日本軍戦時性暴力被害女性・万愛花さんをはじめ、中国の被害者の多くは、とりわけ「慰安婦」という言葉を蔑称だと感じ、自分は「慰安婦」ではないと強く言い続けてきた（万 1997：37）。「慰安婦」という言葉への態度は、それぞれ異なる状況で被害にあった女性たちの、当時と戦後のどんな経験を重視するのかと関係している。「慰安所」へ連行されて被害にあった女性の多かった朝鮮半島と異なり、中国では、「慰安所」の外でのマスレイプ、戦時性暴力や、兵士が前線で私設したいわゆる「強かん所」の被害が非常に多かった（アクティブ･ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」2008:10）。歴史的事実としても、中国の被害については「慰安婦」という言葉だけでは表現しきれない部分が大きい。

そのため、「慰安婦」という呼称については例えば、日本で行われた万愛花さんの追悼集会や、アジア連帯会議の場でも何度か中国に関わる支援者から問題提起され、議論が起きている[注2)]。他地域の被害女性の中にも「慰安婦」という言葉に抵抗を抱く人がいるが、中国の被害女性にとっては「この表現によって、彼女の心はさらに傷つけられている」（何 1997：31）と、直接的に二次被害と認識されている。

本稿では、今回対象とする中国で、この呼称に納得しておられない当事者がいることを重視し、日本軍戦時性暴力／性奴隷制、またその被害者という言葉を採用する。もちろんこの用語も完全ではなく、より多様な立場の被害女性の心情をくみ取りつつ、日本軍の多様な性暴力の実態を包括しうる言葉は今後も考えていかねばならない。

ただし、こうした呼称に対する被害者の意志の尊重と結びついた議論は、支援運動と直接のかかわりを持たない人々には、それが被害事実を認める立場の学者であってもあまり共有されていないのが現状である。それは日本だけの問題ではなく、中国の一般メディアや、一部の研究者も、慰安婦という呼称を「」さえもつけずに用いていることはよくある。この呼称の使い方は、どの用語を採用するかが、その語り手のポジショナリティを如実に表す問題である。そのため、やや表記に混乱が現れる懸念はあるが、引用などについては、原文で使用している言葉をそのまま使用している。

2.2 「大娘」（ダーニャン）、「阿婆」（アポ）の呼称について

日本軍戦時性暴力被害／性奴隷制の被害者支援運動では、上記のような認識から、「日本軍の蛮行をよく表しながら被害者の傷を癒すことのできる名称は、今後も考え続けなければならない」として被害女性に対する呼称自体が一つの論点となっている（尹 2011:43）。

他方で、支援運動の中では、被害女性たちが居住する地域の「おばあさん」を意味する言葉で各地の被害女性を呼ぶことが通例である。韓国ではハルモニ、中国・山西省では大娘（ダーニャン）、中国・海南島では阿婆（アポ）、台湾では阿媽（アマー）などである。呼び名の多様性は、広範で多様な地域に存在する日本軍戦時性暴力／性奴隷制の被害者に、寄り添おうとしてきた支援運動の広がりと厚みをそのまま示している。本稿で紹介するインタビュー中では、しばしばこうした呼称が使用される。適宜、注を付けてそのままもちいている。

3. 中国、香港における日本軍戦時性暴力／性奴隷制をめぐる状況と支援団体

中国では日本軍戦時性暴力／性奴隷制について、韓国やフィリピン、台湾のような、被害女性たちの日常から謝罪賠償請求運動まで寄り添い支える民間支援団体は、本稿 6 節で述べるような様々な事情で立ちあがらなかった。また、香港では 3 年 8 カ月にわたる日本軍占領期に被害を受けた女性はおり、「慰安所」はあったものの、被害者が名乗り出ることはなかった（和仁 2013：91）。

後述する山西省・明らかにする会の共同代表、岡山大学名誉教授の石田米子は、中国での状況について、中国人の中に被害女性をサポートしようという熱意ある個人はおり、そうした人たちのおかげで対日裁判を支えた調査は可能になったものの、「全国組織を持つ中国の各種『民間団体』、例えば中華全国婦女聯合会等」は、石田らの行った被害の聞き取り調査に関わっていないし、「他の国にあるような性暴力被害者をサポートする現地市民グループ・女性グループはない。調査開始当初に比べれば変化は官民双方に確実にあるとはいえ、中国政府の『慰安婦』・性暴力問題、とりわけその個別の解決についての姿勢は必ずしも積極的ではない」（石田 2004：18）と述べている[注3)]。その後、2000 年代後半からは、2007 年に上海師範大学「慰安婦」問題研究センターが資料館を開設（2016 年に中国「慰安婦」歴史博物館と改称）するなど、半公的な記録と教育の動きが始まったが、生活支援は未だ不十分であり、日本政府へ謝罪と賠償を求める運動への支援は行われていない。

しかし、日本軍戦時性暴力／性奴隷制被害者の支援運動は被害国の中だけで閉じているわけではなく、国際的に展開されてきた。加害国である日本でも女性国際戦犯法廷の呼びかけ・開催、「女たちの戦争と平和資料館」の設立などをはじめ、被害女性のいる地域とつながって支援をする市民団体の層は厚い。本稿に登場するインタビュー協力者たちが訪れた被害地域では、二つの日本の市民団体が長年ボランタリーな活動を行っている。中国の北方、黄土高原の東に位置する山西省で活動してきた山西省・明らかにする会と、中国の中国最南端に位置する海南省海南島で活動してきたハイナン NET である。この二か所は、中国において日本軍戦時性暴力被害謝罪賠償請求訴訟が起きた地域であり、二つの団体の成立過程も、この日本政府を相手取った裁判と深い関係がある。以下、簡単にそれぞれの団体の紹介を述べる。なお、両団体に提携関係などはなく、両者は独立している。

■山西省・明らかにする会

共同代表：石田米子（岡山大学名誉教授）、加藤修弘（元都立高校教員）、事務局所在地：東京、会員数：約 250 名。会報は「出口気[注4)]」。「山西省における日本軍性暴力の実態を明らかにし、大娘（ダーニャン）たちとともに歩む会」(略称：「山西省・明らかにする会」。以下、略称で記す)。当初は、「中国における日本軍の性暴力の実態を明らかにし、賠償請求裁判を支援する会」としていた。大娘（ダーニャン）は山西省の言葉で「おばあさん」の意であり、日本軍戦時性暴力被害女性への尊敬をこめた呼称である。

1992 年に東京でおこなわれた戦後補償に関する国際公聴会で、中国人女性で初めて日本軍による性暴力被害を訴えた万愛花さんに出会った日本の市民を中心に、96 年より中国山西省の被害女性訪問をはじめた。その後、聞き取り調査を続ける中で 98 年から始まった日本政府に対する損害賠償請求裁判を支援した。聞き取りの成果は『黄土の村の性暴力－大娘たちの戦争は終わらない』（石田・内田 2004）として刊行された。裁判は 2005 年に敗訴に終わったが、その後も被害女性の定期訪

問を続け、「大娘医療募金」と名づけた医療費支援などを行いながら、周辺地域での聞き取り調査も続けている。

近年は、日中の若い世代への教育にも力を入れ、現地フィールドワークへの日中の大学生・若者の同行受け入れを行う。2007年から、「山西省・明らかにする会」の関係者を中心として、被害女性の闘いを伝えるために日本軍戦時性暴力パネル展実行委員会を結成し、中国各地でパネル展を開催してきた。これまでに、山西省・武郷の八路軍紀念館、北京・盧溝橋の抗日戦争紀念館をはじめ、6か所で展示を行った。支援してきた大娘たちはすでに全員が亡くなったが、母の遺志を引き継いだ次世代とともにこれらの活動を行っている。

■ハイナンNET[注5)]

最後の「慰安婦」裁判と呼ばれた海南島戦時性暴力被害賠償請求訴訟（2001年提訴、2010年最高裁で上告棄却）において、被害女性たちを支え、交流するために集まった日本の若い世代のグループ。2005年に発足。現在のメンバーは10名前後で、代表者や事務局を置かないゆるやかなネットワークの形態をとる。被害女性を海南島の言葉で「おばあさん」を意味する「阿婆」（あぽ／アポ）と呼び、2010年の敗訴後も継続して被害女性を訪問し続けてきた。裁判に参加しなかった被害女性たちの訪問もしており、あぽたちの日常を撮影した写真の展示、大学での出張授業などを日本で行っている。メンバーの一人による、ドキュメンタリー映画「あぽの四季」（監督：米田麻衣）がある。

4. 対象と方法

筆者は2011年から中国山西省、北京、日本にて日本軍戦時性暴力被害者の支援運動のフィールドワークをしてきた。それに加え、2014年からは本科研費の支援を受け、中国海南島、香港、台湾での調査も行っている。本稿では、こうした調査を通じて面識を得た、北京・香港・海南に住む3人の20代女性のインタビューを紹介する。

インタビューはすべて中国語（普通話）をもちいた半構造化面接である。本稿では、筆者の訳により日本語で記述している。インタビューは、執筆時に仮名を用いること、インタビューのテープ起こしをご本人に確認していただくこと、インタビューはいつでも中止が可能であることなどを含めた倫理的な説明を行い、同意を得たうえで実施した。

なお、執筆にあたって、インタビューに登場する人名は基本的に仮名としたが、学者などこの問題について公に発言している一部の人については実名で表記している。地名に関しては、県や省レベルの表記にとどめ、詳細な地名は伏せた。その他、インタビュー協力者の勤務先団体名なども仮名にしている。ただし、日本側の市民運動団体名は実名で表記した。

表1. インタビュー協力者（※氏名はすべて仮名、情報はインタビュー時のもの。）

名前	年齢	職業	居住地	活動内容
蓉榕（ロンロン）	20代	NGO勤務	北京	「山西省明らかにする会」の現地訪問に同行、体験記事執筆、関連上映会の開催など
Nichol（ニコル）	20代	NGO勤務	香港	「山西省明らかにする会」の現地訪問に同行、関連上映会の開催など
莉莉（リリ）	20代	教師	海南島	海南島を訪れる日本人女性のグループ「ハイナンNet」の現地語通訳など

蓉榕とNicholは、1996年に設立された山西省・明らかにする会のフィールドワーク（被害女性・遺族の訪問を含む）に同行したことがきっかけで、この問題に興味を持った。二人とも、元々ジェンダー平等に関連するNGOの職員であり、現地訪問参加後、フェミニズム、NGOメディアへの関連記事執筆、関連するドキュメンタリー映画上映会開催などの活動をしている。

莉莉は2014年、中国海南島の日本軍戦時性暴力被害裁判支援を契機に集まった日本の若者グループ「ハイナンNET」のメンバーと共に、はじめて海南島に住む被害女性を訪問した。それ以来、海南島の現地語[注6)]から中国標準語への通訳など、「ハイナンNET」の活動を支援している。3人とも20代の高学歴女性で、蓉榕とNicholは修士卒、莉莉は4年制大学卒である。

5. 市民運動と人のつながり－二つの入り口

5.1 薄い周囲の関心

現在、中国、香港においても、日本軍の戦時性暴力というテーマは市民の高い関心を得ているとはいえず、実際にこの問

題に取り組む人は、フェミニストの中でも決して多くない。

周囲の関心の薄さはインタビュー協力者全員が強く感じている。莉莉は、「あなたの友人たちはこの活動をどう見ているのか」という質問に、莉莉の会いに行く女性たちが「何者なのか」、「被害者である」ということは話したが、深い理解を示した人はいないと答えた。莉莉の友人たちも、以前「時間がある時に」莉莉と日本軍戦時性暴力の被害女性を訪問したことがある。しかし、友人たちにとってそれは、「阿婆につきあっておしゃべりをする」ことにすぎず、「普通の老人にお付き合いするのと同じ、ボランティア精神」の発露に過ぎない。

そして莉莉の家族も、積極的に支持しているとは言えない。

> 莉莉:ママなんかは、最初そんな（筆者註：被害女性を訪ねる）こと必要ないと思っていたんじゃないかな。彼女はつまり……まあ、別にいいけど、と。反対はしなかったけど、すごく賛成も、支持もしなかった。それから、あなた（筆者註：同席したハイナン NET のメンバー）を手伝うようになって、通訳をして。私はそういうことが好きだったし、やりたいとも思っていた。彼女も何も言わなかった。でも、一度、A 村に行って、その時は道が悪くて[注7)]……車でもすごく疲れたでしょ、ママはそんなに疲れるようなことはしてほしくないと。そういう意味では、私があまり消耗したりするなら、いい顔はしないと思う。

こうした周囲の態度について莉莉は、「本当に関心がある人はたぶん少ない。みんな自分の生活が忙しいし、自分の生活を維持しなければいけないし。残念だけど」と、仕方のないことだという。

では、インタビュー協力者たちはどのようにして、日本軍戦時性暴力被害についての運動に関わるようになったのだろうか。3 人の語りからは、市民運動と人のつながりという二つのきっかけがあることがわかる。

5.2 先行する市民運動

まず、先行する市民運動が、インタビュー協力者たちに日本軍戦時性暴力／性奴隷制の被害者やご遺族との出会いの場を用意したことを見ていこう。彼女たちが日本軍戦時性暴力問題と出会ったのは、日本国内で起きた 10 件の謝罪賠償請求裁判がすべて終了した後、2010 年以後である。裁判が終了した後も、裁判支援に集まった人たちの運動は続いていた。そして、被害女性が亡くなった後、その意志を継いで支援者たちと運動を続けるご遺族もすくなくない。長年続けられた活動の蓄積を見たことは、どのインタビュー協力者にも強烈な印象を残している。

> 蓉榕：私にとって一番大きな感想というか、今一番深い印象をもっていることはやっぱり、あなたたち（山西省に継続して通っている人）、あなたたちが（支援を）続けることに、多大な労力をかけているということ。例えば、石田先生（「山西省・明らかにする会」共同代表の石田米子）を見たら、もうお年なのに、いまだにずっと続けている。それから、みんながそれぞれ自分の話や経験を話してくれて、すごくたくさんの人が本当にすごくたくさんの犠牲を払ってきた。それでやっと、ずっと続けてこられたんだと。

蓉榕は、山西省・明らかにする会は経験豊富な歴史調査者たちだと思って参加したが、実際の印象は「とにかく“人”」だったという。「体は大丈夫なの？」とか、「誰誰は最近どう？」という「細やかな関心」、生活上の細かなニーズを聞きあう、支援者と現地の人との関係に驚いた。Nichol も同様の感想を語っている。

> Nichol: 日本人のグループが、とても長い間、数年どころではなく、数十年の間、ずっと関心を持ち続けて闘ったということに、本当に敬服する。初めは正義のためだったかもしれないけれど、後に（被害女性たちと）友人になって。これは本当にもう、尊敬する。

蓉榕と Nichol はまず、「山西省・明らかにする会」が 1996 年から 20 年以上の長い期間活動を続けているということに驚きを感じた。Nichol は高齢の被害女性を支援してきた人たち自身も年を重ね、人生の長い時間をこの運動に費やしてきたということ、そして、その過程で、被害女性と支援者の関係がとても近しくなっていることを印象深く語っている。

Nichol は 2015 年に、蓉榕は 2016 年に山西省・明らかにする会のフィールドワークに参加しており、互いに面識はない。Nichol が現地を訪問した際には、山西省の対日謝罪賠償請求裁判原告で、最後のお一人となっていた、張先兎さんがご存命だった。張先兎さんは 2015 年 11 月にご逝去され、2016 年に現地を訪れた蓉榕は被害女性との対面はしていない。

被害女性たちがご存命だったとしても、山西省・明らかにする会やハイナン NET は現在、同行した外部者の前で被害体験を語ることを求めていない。かつて日本でもさかんにおこなわれた被害体験の証言活動は、被害女性たちの訴訟が起きる中で生まれた運動であった。山西省・明らかにする会の聞き取り調査について、石田米子は「個人を原告とする裁判という

条件」がカムアウトをひきだし、聞き取りは「裁判という条件付けの中で具体的に成立したこと、あるいは成立していることを自覚している」（石田 2004：23）と書いている。

証言は、日本の司法でも重篤な PTSD が認定され（アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」 2013）、時に体験を語る中で失神するほどの苦痛を味わう[注8)] 被害女性たちにとって大きな負担である。裁判は、被害女性にトラウマ的な体験を語ることを迫る。それは苦痛をもたらすことがあるが、しかし、同時になぜ語るのかという必要性も納得されやすい。

ハイナン NET の米田麻衣は、「加害者側である日本人」を被害女性とご家族が受け入れてくれたのは、「裁判をサポートしている日本人だから受け入れてくれているという理由も大きかったのではないか」と述べる一方（米田 2017：67）、「日本人」である自分が訪ねていくこと自体が被害女性にトラウマを想起させる原因となるのではないかという生々しい葛藤も語っている[注9)]。もちろん中には、語り部としての使命感から証言活動を続ける被害女性もおられ[注10)]、また、米田自身も現地語の通じない彼女に対しても、被害女性が戦争のことを語り始めることがあったというように、語る衝動に駆られる被害女性もいる。だが、裁判が終了した今、語るか語らないかの選択は、いずれにせよ被害女性自身の選択であるべきだという支援者たちの配慮は、被害女性の傷の深さを思えば決して不思議ではない。

したがって、かつて 90 年代や 2000 年代の証言集会などで被害女性と出会った人々とは異なり、インタビュー協力者たちが被害女性の居住地を訪ねて目にしたのは、現在の被害女性の最晩年の生活、被害女性やご家族と支援者の関係、現地の調査の中で培われてきた現地の中国人と、日本人支援者の関係などであった。特に関心がなければ、それは莉莉の友人たちが言ったように、「普通の老人にお付き合いするのと同じ」と見えてしまうかもしれない。

しかし、そうした長年の運動が培ってきた人と人の信頼関係や、積み重ねられた配慮、会話からわかる被害事実の断片を目の当たりにしたことは、直接の証言と同じくらいインタビュー協力者に影響を与えている。

> Nichol:それから、私は現実の大娘に出会ったから、それが。もしわたしが本や映画を見ただけだったら、ああいう明らかにする会のみんな、あなた（熱田）、E たち（ハイナン NET メンバー、香港を訪問した際に Nichol と会った）との直接の交流がなかったら、こういう本物の交流がなかったら、関心を持ち続けるのは難しかったと思う。本を閉じたら、映画が終われば、それでおしまい。でも……あれが、そう、あの関係があったから。だから続けられると思う。
>
> 熱田：じゃ、あなたが言う交流は、明らかにする会とかも含めた？　それとも……？
>
> Nichol:うん、そのとおり、そうそう。
>
> 熱田：当事者との交流だけではなくて。
>
> Nichol:うん、そうそう。

被害女性や遺族、現地の支援者と、日本の支援者の関係もまた、彼女に強い印象を残した。蓉榕は、既に被害女性は全員亡くなっていることを知りつつ現地訪問に参加した理由として、「もし、さらに時間がたてば、ご家族や、被害女性のもとに集まってきた人たちにも会うことが難しくなる。そうなれば、理解の機会は完全になくなってしまう」と述べ、支援者や、被害女性の遺志を継いだ家族に会うこと自体も参加の目的だったという。先行する支援運動の存在や活動の蓄積が、新たな参加者をひきつけていることがわかる。

5.3 同世代からもたらされる生きた情報

しかし、こうした支援団体のフィールドワークに参加する以前に、日本軍戦時性暴力／性奴隷制に関心を持っていたかという質問をしたところ、インタビュー協力者全員が NO と答えた。下記にまとめた一覧からは、中国、香港の若い世代である彼女たちが、周囲の人々同様、被害女性に対する具体的なイメージを持っていなかったことがわかる。

表 2. 活動参加以前に日本軍戦時性暴力／性奴隷制に関心があったかという質問への答え

蓉榕	・大学で歴史小説についての授業を取って、歴史叙述や主体の問題には興味があった
Nichol	・戦争の歴史に特に興味があったとは言えない
	・仕事の関係（セクハラ防止啓発）で性暴力被害を受けた女性には興味があった
莉莉	・「慰安婦」がいた、南京大虐殺があったということは知っていた。だが、それはただ歴史だと思っていて、自分からは遠いことだった。

莉莉は歴史にはどちらかというと興味があると言い、「慰安婦」がいたことは知っていたが、ハイナン NET に参加する前は、自分からは遠いことだったと述べる。Nichol は、山西省に行く以前は「慰安婦」についてほとんど知らなかった。「香

港で私たちが中国の歴史を学ぶときに、教科書に書いてあったかどうかは知らないけど、中学の先生が話した」が、それは「ちょっと、軽く触れただけであとは何も。何も彼女たちの視点から論じることはなかった、彼女たちも戦争の被害者なのだと、それだけ」だった。

中国本土と香港の教育課程は異なるが、莉莉とNicholの感想はここで共通している。被害国で生活していても、戦争被害を身近に感じる人は多くない。極めて薄い関心しかもっていなかった彼女たちを、支援団体の活動に参加させたのは何だったのか。大きな役割を果たしたのは、同世代の友人からもたらされる情報であった。莉莉は、大学時代、中国留学中のハイナンNETのメンバーと知り合った。これがきっかけで被害女性に興味を持ったことを、彼女は以下のように記している。

> 麻衣はここの言葉でおばあちゃんに挨拶し、食べ物や、着るもの、日用品、日本から持ってきた薬なんかを手渡した。体の調子をたずね、足の傷に薬を塗り、おばあちゃんのために部屋の掃除をする。ことばはわからなくても、一生懸命おばあちゃんに耳を傾けている……それが、わたしがはじめておばあちゃんと会ったとき見たことだ。
>
> 言葉も通じない2人の祖母と孫のような親密さに、感動がこみあげた。麻衣と彼女の友達は最初標準語すらできなかったという。なのに、こんなところまでやってきて、おばあちゃんたちと親しく、言葉が通じずとも寄り添う関係を築いた。彼女たちの勇気に、心が激しく波だった。口には出さなかったけど、私はもう決めていた。被害女性に関心を持つ麻衣と、その友達のために、できることをしよう。（ゆる・ふぇみカフェ運営委員会 2015:81）

なぜ毎回ハイナンNETに同行するのかという質問に、莉莉は「あなた（同席したハイナンNETのメンバー）がアポに関心を持っていることが理由だと思う」と答えている。5.1で述べたのと同じく、被害女性と支援者の関係を見たことがインタビュー協力者に影響を与えている。そして、莉莉はハイナンNETとともに被害女性に会う中で、「いつも楽しく過ごしてほしい」と願い、積極的に会いに行くようになった。

> 莉莉：私は小さいころから、父方も母方もおばあちゃんがいなくて。
>
> 熱田：そうなんだ。
>
> 莉莉：そう、だから私はおばあちゃんたちと一緒に過ごしたこととか……。
>
> 熱田：あなたが生まれたときにはもう亡くなっていたの？
>
> 莉莉:うん。だから、アポたちと一緒に話していると、アポたちはすごくかわいくて、親切で。SHINSETSU（日本語）。私にもすごくよくしてくれて。すごくいい人なの、家族と一緒にいるような気持になる。自分のおばあちゃんと同じように思えてくる。私も彼女たちのことがすごく好きになった。

ハイナンNETメンバーと被害女性の間の「祖母と孫のような親密さ」に感激した莉莉は、いつしか自分自身被害女性を祖母のような存在と見なすようになっていった。日本という加害国に生きる自覚を抱えたハイナンNETメンバーが時に、「祖母と孫」という表現にためらいをみせることに比べ[注11)]、莉莉は親しみを率直に表現する。

莉莉の役割は、莉莉とハイナンNETメンバーの年齢が近く、莉莉が現地に住む中国人としてハイナンNETを手助けできる部分が大きいこと、中国標準語と現地語両方を話す莉莉の通訳なしにハイナンNETメンバーが被害女性の言葉を理解できないことによって大きくなった。山西省と海南島では、インタビュー協力者と先行する支援運動のメンバーの関係に差異がある。

山西省・明らかにする会の成員は90年代に支援運動に参加し始めた人々が中心であり、主要メンバーはすでに定年退職を迎えている。それに対し、ハイナンNETは裁判進行時に大学生前後、現在は30代の人々が中心である。山西省・明らかにする会のメンバーを蓉榕やNicholが「先生」と敬称で呼ぶのに対し、同世代であるという気安さから、莉莉とハイナンNETのメンバーの関係はより友人関係に近い。現地への入り方も、山西省では山西省・明らかにする会が作りあげてきた長年の人脈に多くを頼るのに対し、海南島では若い世代が自らフィールドに入る手段を調達している。蓉榕やNicholは山西省・明らかにする会の活動に継続参加するのではなく、それぞれ自分の活動を立ちあげたが、莉莉がハイナンNETの活動に継続参加している違いは、こうしたところからきているのだろう[注12)]。

つまり、先行する市民運動があればそこに新たな参加者が集まってくるのではなく、同世代を通して活動に触れること、また自らがその活動の中で果たす役割があることが重要であるということだ。蓉榕やNicholがフィールドワークに参加するきっかけにも、同世代の友人の存在が関わっている。

> 熱田：あの時なぜ山西省に行こうと思ったの？　興味を持つ人は多いけど、現地まで行こうという人は少ないから。
>
> Nichol：うん、うん……うん、まず第一にあなた（熱田）がいたから、その関係だね。あなたが山西省にはもう（生存

しておられる）大娘は一人しかいないと言ったから、今の機会を逃せばもう本当の大娘に会うことはできない、本を通して知るか、親族の話を聞くことはできるかもしれないけど、と思った。だからあの機会は貴重だった。

Nichol と筆者は、以前、香港の NGO を筆者が訪問した際、ジェンダーやフェミニズムへの共通の関心から知り合い、同世代の友人関係にあった。そして、筆者が参加している山西省のフィールドワークの様子を話したこと、すでに生存者はお一人になっていると言ったことが、「この機会を逃せば」という思いにつながったという。

蓉榕は、以前山西省のフィールド調査に参加した仲間の報告を通じて興味を持った。

蓉榕：以前に（フィールドワークに）参加した仲間が、山西省・明らかにする会はこの方面についてすごくプロフェッショナルで、非常に長い時間取り組んでいるというのを聞いたからもある。私は研究員として、そういうことをどうやって実行するのかを知りたかった。どうやって方法論を持って、体系的に行うのか。資料なんかの整理、当事者や家族とのコミュニケーションの仕方はどうするのかまで含めて。

Nichol と蓉榕は、二人ともジェンダーに関わる仕事をしているという共通点がある。彼女たちはジェンダーや性暴力に対する職業的な関心もあって山西省のフィールドワークに参加した。そして、自らのフェミニズムなどの運動と、日本軍戦時性暴力被害問題をつなげていった。

しかし、様々なジェンダーに関わる事象の中で、特にこの問題に興味を持つきっかけは友人や仲間が関係しているということである。莉莉にとっても、「慰安婦」が歴史上のことから身近な問題になったのは、同世代のハイナン NET メンバーとの出会いを通してだった。以上から、同世代の友人がもたらす体験情報が、支援団体と新たな参加者をつなぐ、強い動機になっていることがわかる。

6. 国家との関係－それぞれの背景の中で

6.1 中国本土・蓉榕，莉莉のケース

インタビュー協力者たちは同世代の友人を通して支援運動に触れ、運動の蓄積を目のあたりにして、自分自身も活動を行うようになった。中国では現地のサポート団体が立ちあがらなかった関係から、居住地を訪れて定期的に裁判・生活支援を行う運動の中では、外国人である日本人の存在が大きくなっている。今回のインタビュー協力者も、全員日本人が関わる支援運動との出会いが、この問題への取り組みのきっかけになっている。それでは、彼女たちは中国や香港における、日本軍戦時性暴力問題と国家の関係をどのように認識しているのだろうか。

国家――この場合は「中国」――との関係は、中国本土と香港では社会的文脈が大きく異なる。まず、中国の例を見て行こう。中国における「慰安婦」に関する新聞のディスコース分析をした宋少鵬によれば、2000 年代後半から 2010 年代にかけてようやく、それまでほとんど中国のこととは扱われなかった「慰安婦」という語彙が、抗日戦争と結びついた国家の歴史に組み込まれ、報道量も増加した（宋 2016）。しかし、「慰安婦」は中国の政治に完全に組み込まれたのかというとそうではない、緊張関係が存在する。

まず、3 節において述べたように、中国では政府自身が近年まで政治問題としては扱わないという姿勢を取ってきたため、政府系の女性団体による支援はほとんど見られなかった（秋山 2016：178）。山西省・明らかにする会にも参加してきた元 NHK プロデューサー池田恵理子のドキュメンタリー映画『大娘たちの戦争は終わらない～中国山西省・黄土の村の性暴力～』では、1995 年の北京世界女性会議で、中国政府が中国の被害女性たちの会議参加を許さなかったことが描かれている。

こうした状況は過去のものになったわけではなく、最近の日本軍戦時性暴力パネル展でも、中国政府が日本政府への配慮から内容に制限をかけることがある。ドキュメンタリー映画『大娘たちの闘いは続く～日本軍性暴力パネル展のあゆみ～』（池田恵理子撮影・編集・構成、2013、制作・ビデオ塾、29 分）では、2011 年に盧溝橋で開催した日本軍戦時性暴力パネル展で、女性国際戦犯法廷の「天皇有罪」判決を記述したパネルは、日本政府を刺激し国際問題につながるとされて、展示できなかったと述べられている。2012 年、南京において日本軍戦時性暴力パネル展を開催した南京師範大学教授・金一虹らは警察によって展示が途中で撤去されるという経験をした（金 2016）。

蓉榕も、中国で日本軍戦時性暴力の問題を語り、謝罪賠償請求などの運動につなげることはかなり厳しいと感じている。

彼女たちが日本軍戦時性暴力のドキュメンタリー映画上映会を行おうとした時も、中国の警察から中止しろとの圧力がかかった。

2017 年、中国ではドキュメンタリー映画『二十二』（郭柯監督、2017、112 分（公開版では 99 分））が劇場公開された。制作時生存していた中国の「慰安婦」[注13] 被害女性 22 人の姿を撮影し、中国で初めて劇場公開の検閲を通った「慰安婦」記録映画として売り出し、商業的にも成功をおさめた。『二十二』は堂々と公開されているが、蓉榕たちの別の映画の上映会は中止せよと言われたのはなぜか、と聞くと、以下のような答えが返って来た。

熱田：じゃあ、その（警察に止められた）時、『二十二』は今すごく注目されているのに、どうしてあなたたちの上映会は中止させられたんだと思う？

蓉榕：彼ら、警察ははっきりと「テーマが『敏感』だ」と言ったから、その意味は明らかだった。つまり、私は、上映会の実施自体が一つのテストだと思っていた。彼らの態度を探ったわけ。元々は『二十二』が結構注目されているし、みんなこのテーマに興味があって、このテーマもわりと合法的な雰囲気になったかなと。だけど、やっぱり政府は私がこのテーマでたくさんの人を集めるということに、それが何をするためであろうと、やっぱり警戒している、まだまだこうなんじゃないかな。つまり、この方面についての私たちの心配は、つまり杞憂ではないと証明された。治安維持の視点で（中止しろと）言ったんだと思う。

治安維持の観点から、中国政府は被害女性を支持する人たちが自発的な市民グループをつくるようなことを、極めて警戒している。その警戒感は、政府自身の対応に批判が向くことへの警戒感でもある。蓉榕はヒットした『二十二』が、「辛くても政府に頼ってはならない」とメッセージを発していると感じた。

蓉榕：つまり、（『二十二』は）制度上の問題はほとんど問わない。山西省に行ったとき、実は私は、一時すごく怒りを感じた。万大娘（万愛花さん）が、抗日戦争を戦った後、ものすごく長い間誰も彼女の面倒を見なかった。そして、彼女は八路軍の抗日ゲリラだったわけだけど、その（軍の）階級も、戦争が終わってすぐに認められたわけではない。

蓉榕らフェミニストたちは、日本政府の責任追及だけでなく、戦後、最近まで中国政府が日本軍戦時性暴力の被害女性を積極的に支援しなかったことも問題視している。しかし、こうした視点で日本軍戦時性暴力被害を取りあげることは、「敏感な」問題とみなされる。

このように、中国で日本軍戦時性暴力被害を取りあげることは、必ずしも「愛国」と結びつくわけではない。そして蓉榕にとっては、日本軍戦時性暴力被害に取り組むこと、日本軍戦時性暴力被害に取り組む日本人と出会うことは、むしろ「愛国主義」を批判的にとらえかえす積極的な意味も持っていた。

蓉榕：私は、国家が民族主義的なものを教育やメディアの宣伝の中に混ぜ込んでいると思っている。だから、現実の歴史の姿を見なければいけないと思ったし、そうしないと民族主義に巻き込まれて行ってしまうところから、抜け出せないと思った。（中略）それに私は「山西省・明らかにする会」がしてきたことや、どういう情熱が彼らを動かしているのか知りたかった。そういう人たちと出会うことで、私たちの「愛国主義」なるものへの多くの疑問が解けるのではないかと思った。

フェミニストである蓉榕は、中国の民族主義と家父長制の間に「ものすごく関係がある」と思っている。「現実の歴史の姿」を見る――ここでは、山西省に行き、被害女性の関係者や日本人支援者の話を聞くことで、彼女はその父権的な民族や愛国の表象から抜け出せるのではないかと考えた。

ただし、現地を訪れた後、蓉榕の思想的な関心は別の葛藤につながっている。蓉榕は現地で、反政府的と受けとめられて被害女性やその家族に迷惑がかかることを怖れ、極めて慎重にふるまう山西省・明らかにする会とその関係者の姿を目にした。「現地の地方政府との関係については注意しなければならない」、「（ご遺族への）影響を考えたら、あんまりそういうこと（政府批判）は言えない」と先行する支援運動のあり方を理解しつつも、彼女は自分の、ある程度の危険を受け入れつつ政府の問題点を指摘してきた「アクティビストとしての理念」との間の矛盾に、内心深く悩んだという。

蓉榕：内輪でなら、うちの NGO のインターンの子たちとか、他のアクティビストとの間でなら、今でも問題はある、（中国）政府の問題なんだといえる。だけど、ご家族とか、他の関係者に迷惑や圧力がかかることは、公開では言えない。だけど私はこのことに強い鬱屈を感じた。だからあまりよく知らない人たちに話すときは、そんなに詳しくは言わない。そう、だから、ああ、だからこれは私の悩み。あなたは（日本で）同じようなこと、ある？

「これは私の悩み」、という言葉からは、蓉榕の、自らの理念に被害女性のご遺族を巻き込んではならないという決意がう

かがえる。しかし、この「葛藤」（⊠⊠）、「鬱屈」（⊠屈感）は、若い世代のフェミニストである彼女にとって、極めて強烈であり、現地で支援活動に参加する年長の中国人たちの話を聞きながら、やっと気持ちの折り合いをつけたという。蓉榕は、現地に行った動機の一つとして、「被害女性が亡くなった現在、自分に何ができるか知りたかった」とも語っており、現在も上映会などの活動をしつつ、中国の現在の社会の中で「自分にできること」を模索している。

莉莉は蓉榕とは異なり、普段、警察から直接圧力をかけられるような市民運動、フェミニズム活動には関わっていない。そんな彼女は、日本人であるハイナン NET メンバーがこの問題に取り組んでいることを見て、「中国人」も何かをしなければという認識を呼び起こされている。

莉莉：あなた（同席したハイナン NET メンバー）が（被害女性を）訪ねたいと思っているから、あなたが彼女たち（被害女性）に関心を持っているから、だから私も中国人として関心を持つべきだと思った。

莉莉は元々「歴史がすごく好きだとは言えなかった」が、ハイナン NET メンバーとの出会いのあと、「徐々に自分も歴史に興味を持つようになった」という。そして、日本人支援者との出会いは、彼女の日本という国への印象も変えた。莉莉は、以前、日本のアダルト・ビデオや、性差別的な日本のバラエティ番組に関する情報、また政治家の靖国神社参拝のニュースなどから、日本に対していい印象を抱いていなかった。

莉莉：そういうのが以前の印象ね、日本人への。

熱田：うん。

莉莉：でも、E（ハイナン NET メンバー）に出会って、彼女のことを知ってから、彼女のしていることっていうのは、一種、国境を超えることだと思うようになった。わかる？　つまり、本当の弱者への関心、本物の愛ということ、わかる？

このように、加害国である日本の若者が日本軍戦時性暴力被害に取り組む様子が、莉莉にとっての「日本人」の印象を変え、この問題が「国境を超える」ことだという認識をもたらすようになった。莉莉は、現在、日本軍戦時性暴力被害は、「人道主義」の問題だと思っている。

莉莉：それから（日本軍戦時性暴力被害への取り組みが、被害女性個人のためだということに加えて）、すごく大きな視点があると思う。つまり、人道主義という視点。彼女たちは戦争の被害者で、だから、日本政府の謝罪と、それに賠償も受けるべきだと思う。もしかしたら、彼女たちはもう賠償なんて気にしていない、晩年を静かに過ごしたいというかもしれない。でも、やっぱり、最低でも謝罪はしなければならない。それは彼女たちに対してだけでなく、人類に対してのある種、なんというか、全人類にとってとても重要なことだと思うから。

日本政府が、もしも被害女性に公式謝罪、賠償をしたら、中国人の日本への印象は変わるだろうか、という質問に、莉莉は「きっと（印象は）よくなると思う」と答えた。今、中国には日本を嫌う人も、日本製品が好きな人もいる。それは中国にとっても、「一種の衝突」、「一種の矛盾」になっているのだからと。

6.2 香港・Nichol のケース

次に、香港の例を見てみよう。Nichol は、香港で日本軍戦時性暴力被害／性奴隷制問題を取りあげることに対する、市民の拒否感を感じている。

熱田：じゃあ、今香港でこの問題を取り上げるのは難しいと思う？

Nichol:すごく難しい（笑）（山西省への被害女性訪問から）帰って以降、2 回上映会をしたでしょう。最初は、本当に香港でこの問題を取り上げるのはもう、あー、まず香港には社会問題がありすぎるし、みんな……香港に関係がないと関心を持つ余裕はない、香港の今の政治問題（中国との関係）につながらないと。だから難しい。第二に、「慰安婦」について香港で語る人は「愛国」に落とし込もうとする人が多くて、で、愛国と言えば……香港で社会問題に関心がある人は、みんな中国のものには抵抗するということがある。

2014 年に香港で、中国政府の統制に反対し民主化を求める大規模なデモ、雨傘運動が起きたことは記憶に新しい。それに先立つ 2012 年、香港では、中国政府が「道徳・国民教育」をすべての学校に導入しようとしたことに対する「愛国教育」反対運動が起き、最終的に導入が見送られている。一国二制度のあり様が揺らぐ中で、雨傘運動においては、香港自治維持・促進を唱える民主派と、親中派の激しい対立が顕在化した。ポスト・コロニアルな状況にある香港のナショナリズムは

単純には語れない。「国家」といえば中国であるが、中国に対抗して香港への帰属意識を高める「本土派」（ここで言う「本土」は香港を指す）の台頭が著しい（區 2015）。

こうした社会状況を背景に、「慰安婦」問題は親中派の「愛国」主義を唱える人々が関心を持つテーマという構図が作られ、多くは民主派である「社会問題に関心がある人」は興味を持たない。中国本土で蓉榕たちが直面する、日本軍戦時性暴力問題と中国政府の間の「敏感」な緊張関係は、香港の市民には共有されていない。民主化を支持するフェミニストの Nichol 自身、かつては同じく関心を持たなかった。「以前も今も、中国に関するイメージはどちらかといえばマイナスのもの」だと語る Nichol は、支援運動が「日本人によって組織されている」という点が「自分を惹きつけた最大の原因」だったとはっきり言う。

Nichol:明らかにする会の（被害女性やご遺族との）交流は本当に印象的だった。明らかにする会の人たちはみんな、民族主義の枷を解いて、本当に個人の人権の問題として関心を持っていたから。それが本当に……それにこれほど継続しているなんて……だからもしも中国の団体が、同じように張先兎さんを訪ねようと言っていたら、私は絶対こんなに……うん、こんなに関心を持たなかった。

熱田：そうか、じゃああなたにとって、日本人がこの問題に関心を持っているというのが……。

Nichol:そう。

熱田：わりと重要だった？

Nichol:そう、ものすごく特別なことだった。

Nichol もまた、日本軍戦時性暴力問題への取り組みに「民族主義の枷」を解く可能性を感じている。雨傘運動の最中に、親中派による女性への性暴力を目の当たりにしたこと、またキリスト教徒である Nichol が見聞きした教会内の性暴力が、「自らの国の人間、自分自身の血につながる伝統も深く女性を傷つけている」という認識をもたらした。Nichol は、民族主義はフェミニズムと明確に対立すると思っている。

熱田：じゃあ、あなたは、民族主義はジェンダーに対して有害だと思う？

Nichol：有害。私は民族主義というのはそもそも家父長制的なものだと思う。つまり、あなたがある国の人間ならば、国家に忠誠を誓わなければいけない、理性を捨てても国を守らなければならない。それをコントロールしているものは、ものすごく家父長制的だと思う。だから、民族主義を語るならば、ジェンダーについては絶対同時に語れない。

そして、Nichol 自身思いもしないことだったが、被害女性たちのために日本の支援団体と一緒に地道な支援をしてきた、何人かの中国人の姿を見て、中国に対する認識も変わったという。「自分の信念に忠実で、寛容で、計算づくのところがない」、「中国人は本来こうあるべきだと思うような人たちだった」と、Nichol は彼らを絶賛する。支援運動に関わる「人」は、抽象的な抑圧者とは異なる中国のイメージとして表象されている。Nichol にとって、それは親中派の「愛国主義」と、彼らに反対する民主派という香港社会の構図を離れ、「中国」を別の角度から見つめる経験になった。

しかし、香港社会で、こうした新しい視点で日本軍戦時性暴力を語る場を作ることは、やはり容易ではない。Nichol たちが映画上映会を開催した時、ゲストスピーカーとして、日本軍戦時性暴力について知識のあるジェンダー研究者を探した。しかしこの打診は、Nichol の恩師を含め、複数の学者に断られている。このテーマについて語る香港人を、民主派よりの知識人から探すことは極めて困難だった。結果的に、ゲストスピーカーには、日本人の研究者、支援者を迎えるよりなかったのである。上映会参加者の反応は悪くなかっただけに、Nichol はやや残念な思いを残している。

7. 様々な社会構造の中での日本軍戦時性暴力問題

以上、中国、香港の 3 人の若い、日本軍戦時性暴力問題に取り組むインタビュー協力者の経験を見てきた。中国では戦時性暴力についての対日謝罪賠償請求訴訟の時期に、中国人による現地支援団体が立ちあがらなかった。その空白を埋めるため、被害女性たちの国際的な訴えに応じて集まった日本人支援者たちは、裁判終了後も支援を続けていた。インタビュー協力者たちはこうした人々と出会い、被害女性だけでなく長年被害女性たちと関係を築いてきた支援者にも魅力を感じて、日本軍戦時性暴力被害の問題に取り組むようになった。

この、「証言の時代」を通じて被害女性を支えてきた支援運動の存在と、同世代の友人を介して支援運動の存在を知るということが、彼女たちがこの問題を自分のこととして捉える重要な契機になっていた。人のつながりの中で支援運動が再生

産されていることがわかるし、その連環の中には日本人支援者も含まれている。

日本でしばしば、日本軍戦時性暴力被害の問題化と関連づけられるナショナリズムについては、中国と香港ですら、そもそも「愛国主義」の受けとめられ方が異なっていることにまず注意しなければならない。その上で、日本軍戦時性暴力問題に取り組むことは、むしろ3人のインタビュー協力者にとって、「愛国主義」や民族主義を批判的にとらえることにつながっていたことは注目すべきである。彼女たちは裁判支援運動が終了した時点から日本軍戦時性暴力問題に出会い、それぞれの生きる社会的文脈の中でこの問題を自分の人生に接続しようとしていた。

ここに記したことは、筆者が行ってきたフィールドワークを通じて知りえたことの一部に過ぎない。日本軍戦時性暴力問題と、被害女性をめぐる90年代以降の経緯と現状は、同じ中国の中でも山西省と海南島で大きく異なり、現在に目を向ければ、この問題への社会的な受けとめ方は中国と香港でも違う。歴史学者の吉見義明は、「軍『慰安婦』問題とは、女性に対する性暴力と、他民族差別と、貧しいものに対する差別が重なって起きた問題」（吉見2010:3）と「慰安婦」問題の重層性を述べているが、日本軍戦時性暴力問題と支援運動を考える際にはさらにたくさんの要素が入れ子のように重なっている。適切な理解をするためにはすくなくとも、下記のような視点が必要であろう。

被害女性個人の経験を見る視点
（1）どのような被害にあったか
（2）被害女性のライフストーリー、家族との関係
（3）裁判闘争や支援運動とのその被害女性の関わり
歴史的視点
（4）すべての国、地域で異なる戦時の被害状況
（5）戦後の二次被害や地域社会の状況
（6）90年代以降の「証言の時代」に裁判闘争の中で起きた変化
現在の視点
（7）現在の当該社会の社会的国際的状況
（8）当該社会の中で日本軍戦時性暴力問題がどのように扱われているかと、認識の変化
（9）支援運動がどのような展開をたどり、誰によって、どのように行われているか
（10）支援運動がそれを取り巻く社会の中でどういったものと見なされているか

（1）、（2）は被害女性個人の経験である。（3）は例えば、裁判の原告になった女性と、ならなかった女性の被害回復のあり方の違いとして表れる。（4）は「慰安所」での被害だったのか、戦時強姦、マスレイプだったのか、強姦所の被害か、性拷問かなどの体験の違いである。（5）について、戦後のセカンドレイプは多くの被害女性の経験談に現れている。（6）は、裁判闘争を続ける中で、例えば山西省では「名誉を回復して村の中で胸を張って生きたい」（石田2004：22）といった女性たちの姿が、村社会にも変化をもたらしたことがわかっている。（7）は、主に6節で述べたような、中国政府の市民運動に対する圧迫であったり、香港における中国政府への反発のような、より大きな当該社会の文脈である。（8）は、その社会の中で、戦争被害というだけでなく、理解のためにはジェンダー差別の視点が不可欠な日本軍戦時性暴力が、どのように扱われているのかということである。（9）は、本稿を通じてみてきたように、例えば中国において支援運動を行っているのは中国人とは限らない。韓国や台湾では現地の支援団体が立ちあがっているが、日本人による活動も多く行われている。同時に、（10）その支援運動が、香港のように「中国より」とみられているケースもあるということである。

こうした多様な、個別具体的な要素を一つ一つ見て、はじめて日本軍戦時性暴力問題を取り巻く運動を理解できるのだと思う。韓国や台湾の「慰安婦」支援運動を語る上でも同じだが、日本であまりに安易に使用される、「反日」や「ナショナリズム」といった言葉で語れることなど何もない。

ポスト「証言の時代」に、日本軍戦時性暴力被害女性支援運動はどのように存続していくのかは、支援運動に関わる人たちを含め大きな関心を集めており、今後議論が深められていくと予想される。日本という場所から遠景で見ていると、大雑把な流れにしか見えないのかもしれないが、日本軍戦時性暴力被害支援運動は、名乗り出た被害女性からはじまり、その被害女性に動かされた個人がまた別の個人を動かす、「人」のつながりからすべてが始まっている。蓉榕が、山西省で抱いた、

「とにかく“人”」という印象は、筆者自身が山西省、海南島、その他の被害地域を訪れる中で常に感じていることだ。少なくとも学術的な論考においては、抽象的な議論にふけるのではなく、実際の支援運動に関わる人の経験を丁寧に見ることを、忘れてはならないだろう。

謝　辞

インタビュー協力者の蓉榕さん、Nichol さん、莉莉さん、現地に同行する筆者を受けいれてくださった山西省・明らかにする会、ハイナン NET の皆様、そして何より、長年闘い続けてこられたすべての日本軍戦時性暴力／性奴隷制の被害を受けた女性たちに深い敬意と感謝をささげます。

【 付 記 】

本稿は、平成 26-29 年度科学研究費基盤（B）研究課題「ジェンダー平等社会の実現に資する研究と運動の架橋とネットワーキング」（課題番号 26283013）の助成を受けた研究成果の一部である。また、一部のフィールドノートの情報は、平成 29 年度早稲田大学特定課題研究助成によって行われた調査に負っている。

https://doi.org/10.18910/67844

文　献

アクティブ･ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（wam），2008，『wam カタログ 6　ある日，日本軍がやってきた――中国・戦場での強かんと慰安所――』，アクティブ･ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」.

――，2013『「慰安婦」問題　すべての疑問に答えます。』合同出版.

江川紹子，2013，「日本が誇るべきこと，省みること，そして内外に伝えるべきこと～「慰安婦」問題の理解のために」（2018 年 1 月 5 日閲覧，https://news.yahoo.co.jp/byline/egawashoko/20130525-00025178/）

何清，1997，「『慰安婦』という言葉が被害者をさらに傷つける」戦争犠牲者を心に刻む会編『アジアの声（第 11 集）私は「慰安婦」ではない――日本の侵略と性奴隷』東方出版.

石田米子・内田知行編，2004，『黄土の村の性暴力――大娘たちの戦争は終わらない』創土社.

區龍宇，2015，『香港雨傘運動――プロレタリア民主派の政治論評集』柘植書房新社.

金一虹，2016，「苦難のうちに立ち止まって――日本軍性暴力パネル展の南京における挫折と内省」小浜正子・秋山洋子編『現代中国のジェンダー・ポリティクス――格差・性売買・「慰安婦」』勉誠出版.

熊谷奈緒子，2014，『慰安婦問題』筑摩書房.

屈雅君，2016，「女性・平和・民族自省――陝西師範大学で日本軍性暴力パネル展を開催して」小浜正子・秋山洋子編，『現代中国のジェンダー・ポリティクス――格差・性売買・「慰安婦」』勉誠出版.

岡本有佳・金富子編，2016，『増補改訂版　＜平和の少女像＞はなぜ座り続けるのか』世織書房.

大沼保昭・横田洋三・和田春樹，2006，「＜座談会＞アジア女性基金と私たち」（2018 年 1 月 5 日閲覧，http://www.awf.or.jp/pdf/k0014.pdf）

朴裕河，2014，『帝国の慰安婦――植民地支配と記憶の闘い』朝日新聞出版.

万愛花，1997，「私は『慰安婦』ではない」戦争犠牲者を心に刻む会編『アジアの声（第 11 集）私は「慰安婦」ではない――日本の侵略と性奴隷』東方出版.

宋少鵬，2016，「メディアの中の『慰安婦』ディスコース――記号化された『慰安婦』と『慰安婦』叙述における記憶／忘却のメカニズム」小浜正子・秋山洋子編『現代中国のジェンダー・ポリティクス――格差・性売買・「慰安婦」』勉誠出版.

和仁廉夫，2013，『⊠月無聲：一個日本人追尋香港日佔史跡』花千樹出版社.

米田麻衣，2017，「黄有良アポとの出会いと別れ――中国海南島の日本軍戦時性暴力サバイバーの声」『女たちの 21 世紀』（92），66-67.

吉見義明，2010，『日本軍「慰安婦」制度とは何か』岩波書店.

尹美香，2011，『20 年間の水曜日――日本軍「慰安婦」ハルモニが叫ぶゆるぎない希望』東方出版.

ゆる・ふぇみカフェ運営委員会編，2015，*yurufemi magazine*, vol.1.

Abstract

Recognizing Military Sexual Slavery/Wartime Rape Committed by the Imperial Japanese Army: Post-“Testimonial Period” Interviews in Mainland China and Hong Kong

Keiko Atsuta

In the 90s to 2000s, survivors of the Military Sexual Slavery/Wartime rape by the Imperial Japanese Army came forward, demanding an official apology and legal compensation from the Japanese government. This movement gained widespread support throughout the world. We call this the “testimony period”. The problem is still at issue, but the survivors have passed away one by one. Most of the last remaining survivors have lost much of their physical strength.

Now many young people, especially in Asia, are starting to take over this movement, replacing the survivors. Many Japanese, however, even if liberal intellectuals who are not historical revisionists, regard this “post-testimony” movement as anti-Japanese Nationalism. Is that really correct? Is it not too rough an understanding of the diversity of situation in each country and region?

Through interviews of youths in Mainland China and Hong Kong, this paper discusses the social context of their participation in the movement, how they understand the survivors’ messages, and the previous work of the former movement. In Japan, when this issue is discussed, the media and most intellectuals talk only about the Korean movement. Of course Korean survivors and supporters have been doing good work. But the issue, “Military Sexual Slavery/Wartime rape by the Imperial Japanese Army” is widespread in Asian and other countries and regions. So the report in the present paper on cases in Mainland China and Hong Kong may help us to understand the diversity of the movement.

Keywords: Military Sexual Slavery, Wartime rape, Imperial Japanese Army, Mainland China, Hong Kong, Youth activism, Feminism

注 釈 一 覧

日本軍戦時性暴力／性奴隷制問題との出会い方ーーポスト「証言の時代」の運動参加

1）「慰安婦」、戦時性暴力、性奴隷制などの言葉の本稿における用法については、「2.1 日本軍戦時性暴力／性奴隷制の用語について」を参照のこと。（p. 1）

2） 筆者フィールドノートによる。（p. 2）

3） ただし、全国婦女連は 2001 年に山西省の被害女性たちの対日訴訟を支持するという声明は出している。（p. 3）

4） 山西省の方言で「胸の内を吐き出す」という意味。（p. 3）

5） ブログ　http://blog.goo.ne.jp/hainan-netFacebook https://www.facebook.com/ハイナン net-HainanNet-392516314277636（p. 4）

6） 中国の南に位置する海南島は、中国公用語である普通話（マンダリン）はもちろん通じるものの、日常語においては海南語、リー族の言葉であるリー語をはじめ様々な言語を使う人たちがいる。中国社会一般に言えることだが、若い世代・教育レベルの高い人ほど普通話がうまく、年配者には現地語のみしか話せない方も多い。莉莉は、海南島の現地語の一つを話すことができる。（p. 4）

7） 舗装されていない道を通るので、車に乗っていても激しく揺れ、体が飛びあがるようなことがある。（p. 5）

8） 女性国際戦犯法廷の様子を記録したビデオ塾制作の DVD には、証言の最中に気絶する万愛花さんの姿が記録されている（『女性国際戦犯法廷の記録～「沈黙の歴史をやぶって」』、2001 年、64 分）。石田米子が聞き取りのプロセスを記した記事の中にも、被害女性たちが「被害の核心を語ろうとすると気分が悪くなったり失神したりした」ことが記録されている（石田・内田 2004：22）。（p. 6）

9） 筆者フィールドノートによる。（p. 6）

10） 韓国などには、使命感を持って語り部の役を務めるイ・ヨンスさんのような被害女性もいる。これも、各地域の状況の違いを反映していると考えなければならない。（p. 6）

11） ハイナン NET メンバーの一人、米田麻衣自身は「祖母と孫」という好意的な表現について、被害女性を身近で支え続けてきた実の孫たちの努力を考え、日本政府による謝罪も賠償ももたらすことのできなかった罪責感を抱える自分自身を顧みれば、「『孫のよう』なんて言えない」と語っている（米田　2017：67）。（p. 7）

12） 山西省では、長年山西省・明らかにする会の通訳をしている、年長の中国人参加者がいる。（p. 7）

13） この映画では「慰安婦」の語が使用されている。（p. 9）